

次に流行に影響を及ぼすのは社會の状態でその種類遲速の上に激しい變化を來すことがございます。例へば戰爭の時は萬民の心が齊しく軍事に向ひますから、何でも戰爭に關係ある名前がついて流行してをります。今度の歐洲戰亂でバリーの流行服や帽子が軍事に關係する形をとるか、日露戰役の後にはシャボンに乃木ムスク帽子に東郷ハットが出来たり致しましたし、又人々が戰勝を祝し我軍の英雄を賞讃する類のものを非常な力で傳播したり交通のはげしい事などで流行も速でございます。又戰爭前の社會と戰後とは同じ平和でも戰後の方は人の心が内に向ひ裝飾品よりも實用品の流行が行はれます。

流行は社會思想の現れでございますが、社會思想は時によつて違ひます。これを時代思想又は時代精神と申します。それで流行は時代思想の表現ともいへます。社會状態は時代思想の形で流行は其の内容でございます。即時時代思想は本質で社會状態はそのあらはれ、流行はその間を貫いて流れる種々の現象といふことが出來ます。質素な風俗は時代思想の剛健を示します。鎌倉時代はこれで反對にはでな元祿時代の風俗は時代思想の軟弱をあらはしてをります。

かやうに時代思想と流行とは互に影響しあつてお互に移り變るもので時代思想によつて流行を流行によつて時代思想を窺ひ知ることが出來ます。

報 告

大正五年我史學界地理學會に於ける諸研究の概要を述べ以て斯界の趨勢を報告す。

先づ史學界の概況を述べんに、特に表れたるものなけれども一般史學界は諸種の研究いよ／＼すみみて其の公にせらるゝもの多く、「國史講習録」の發行「歴史講座」の刊行は國史の知識を普及するにあづかりて力あり、又大典紀念事業として地方史の編纂せらるゝもの多し。

尙各部に亘りて之を見るに、史學の原理に關しては從來我が國の史學界に於て論究せらるゝ事最も少き方面なりしが最近に至りて次第に注意を惹くに至り、其の方面の研究も漸く公にせらるゝに至り、安部氏の「リツケルトの歴史學の觀念について」夏山氏の「歴史とは何ぞや」など表れたり。この外史學が他の學科と如何なる關係を有するかにつきても大に注目せられ殊に社會學との關係につきての論文多し。

次に國史につきてあぐべきものは一般史時代史としては、早稻田大學出版の「訂正増補大日本時代史」中村氏の「日本近世史」大類氏の「本邦上古の戰闘」牧野氏の「後北條氏民政史論」岡部氏の「東京奠都真相」あり其の他外交關係としては三浦氏の「應永の外寇」藤井氏の「應永の博多津に關する史料」内田氏の「徳川時代に於ける日本と暹羅との關係につきて」新村氏の「天明時代の海外思想」河野氏の「安永以前松前藩と露人との關係」などなり。

傳記及び人物評論の方面に於ける特色としては、研究の對象に佛者の多かりし事なり。各種文化に於ても各方面に其の研究をすゝめたり。其の二三をあぐれば岡田氏の「憲法十七條に就いて」三浦氏の「日本古代の追放刑論」魚澄氏の「下司と地頭とに就て」内田氏「本多利明の經濟學說」「徳川時代の人口」霍美氏の「大寶令新解」穂積氏「法窓夜話」等著名なるものなり。

村上氏の「眞宗全史」辻氏の「信仰上より見たる頼朝、尊氏、家康」は宗教方面に於て見るべきものにして思想の方面に於ては津田氏の「文學に現れたる我國民思想の研究貴族文學の時代」あり。

文學藝術に於ても其の研究盛にして瀧氏の「法隆寺金堂の壁畫について」「印度藝術の東亞に及ぼせる影響について」澤村氏の「禪宗の興隆と本邦の肖像畫に就いて」其の外繪畫彫刻建築等各方面に其研究の成果を見たり。

尙宮地氏の「皇太子の御儀服に就いて」櫻井氏「平安朝以降の立太子禮について」などは時機に投じてあらはれしものなり。

其の他民族、都市、交通に關するものなど諸方面に亘りて研究せられたり。地方史、史論としては「名古屋市史」「奥州沿革史論」あり。最後に刊行物にては「大日本史料」「大日本古文書」等主なるものなり。

朝鮮につきては全般に亘るものとして今西氏の「朝鮮史の棗」あり。尙朝鮮の歴史地理の研究には、東京帝國大學が南滿洲鐵道株式會社の委託をうけて其の研究の結果を発表せるものに「滿鮮歴史地理研究報告」(二冊)あり。其の他朝鮮總督府にては昨年來、朝鮮半島史の編纂を企て三浦、黑板、今西、諸氏等を委員とし

て之に着手せり。

東洋史の研究に於ては井上氏の「支那の將來」白鳥氏の「支那時局觀」中村氏の「論語に關する西洋人著述の書史」あり。支那に關しては目下の必要上其の研究盛なり。

滿洲に關しては前述の「滿鮮歴史地理研究報告」あり。

西洋史に於てはすでにあらはれたる「西洋全史」「西洋通史」の外、新に刊行せられたる大類氏の「西洋時代史觀、中世」村川氏の「西洋上古史」は常に參考書として其の價值大なるのみならず學術的價值を有するものなり。特殊問題に關しては最近世史中就中時局に對する史學的研究最多し。其の中見るべきものは原氏の「大戰外交上の論争點」長岡氏の「歐洲大戰勃發前後の列強外交」林氏の「最近の巴爾幹問題」箕作氏の「殖民地整理に關する大戰前の英獨協商」「民族主義に關する獨逸思想の變調」等なり。尙佛國革命以後に於ける一般最近世史の研究又見るべきものあり。

最後に考古學に關して注目すべき事は京都文科大学に「考古學講座」の創設せられし事にして、尙この方面に於ては古蹟發掘保存に注意せらるゝに至れり。研究の方面にては古墳及び遺蹟の調査は九州方面が學者の注意する所なりし事にして其の研究の公にせらるゝもの續出するに至れり。

朝鮮に於てはこれが發掘の調査を専門家に托し、價值ある確實なる資料發見せられ考古學研究の機運大に動きつゝあり。

次に地理學界に關して述べんに歐洲戰亂の影響によりて海外出版物殊に獨逸の書籍の輸入甚だ稀にして學界の狀況を詳かにする事能はざるも一般に戰争的色彩を帶ぶるに至り、戰争に關する研究多し。其の著しき

ものを軍事地理學の研究なりとす。數年來盛なりし探檢の甚しく振はざるも亦戰亂の影響に外ならず。唯「シヤックルトン」の南極に向へるもの「オーレルスタイン」の中央亞細亞に向ひたるものあるのみなり。地理趨勢はかくの如くなるが翻つて我國の状況を見るに、斯學界が戰亂の影響を蒙りたる事多きも反て獨創の研究の大に起らんとせるは喜ぶべき事なり。其の著しきものは軍事地理學の研究と近來勃興せる登山趣味の普及と共に山岳の研究、國內各地方誌、並に新領地、殊に南洋の自然及人文地理學的研究、火山研究之なり。今之を類別すれば自然地理學に於ては、地理學に關係深き地質學上の研究山崎氏「地層中の氷層に就きて」恒藤氏「日本土壤學」あり。

氣界地理學に於て岡田氏「雨」は科學的通俗的の記述にして一般的な好讀物たり。

地形學に關して山崎氏「大陸の單元に就いて」はそのあぐべきものなく。近來山岳趣味普及したる結果として、山岳研究、登山案内續出するに至れり。登山案内としては山林局發行「登山心得」は小冊子なれ共登山者にとりて甚だ益あるものなり。火山學地震學の方面にては近來著しき噴火、地震ありしたためにこの方面の研究盛にして小藤氏「日本の火山」及「櫻島噴火」の論文あり。

地震の方面を主として論せるものには大森氏「櫻島の噴火及び地震」「伊豆三原山噴火概報」今村氏、碧海氏、大橋氏「大正三年秋田縣仙北郡大地震調査報文」大森氏「臺灣近年の強震について」等あり。

人文地理學に關するものには鐵道院調査による「日本鐵道の社會及び經濟に及ぼせる影響」井上氏「世界に於ける鐵道並に石炭の分布及び其の供給如何」齋藤氏「内外の製鐵事業に就いて」片岡氏「現代都市の研究」等あり内閣統計局「帝國人口概説」は大正二年末調査に據るものにして帝國人口發展を知るに便なり。

軍事地理學として最初に表れしは小川氏「戰爭の地理的意義及其研究に就いて」にして、從來の軍事地理學が陸戰のみにて海戰を含まざる極めて狹義のものにして、而も實用を主とし非科學的なるを慨し、之を人文地理學的に研究する方法につきて意見をのべ、併せて斯學上より戰爭の性質、區別、分布等を考察せるものなり。又同氏の歐洲の戰亂地を地學的方面より見たるものに「歐洲戰局の地理學的考察」あり。

地方誌に於て見るべきものは内田氏「南洋の意義」山崎氏「我が南洋」専門學務局「南洋新領地視察報告」あり。馬來南洋に關するものには通商局「蘭領東印度事情」あり。

支那方面に關しては小藤氏「支那本部の區劃」東亞同文會「最近支那貿易」其の主要なるものなり。支那に關しては特に東京地學協會に於て四年の歲月を費し中支那及南支那の調査を完了し、今將に其報告を出版せんとせり。

目下最必要なる事局に關しては米國研究、支那研究、獨逸研究、露國研究等列國の經濟方面の研究多く、産業地理の好資料たり。現代叢書五冊は日本史料調査會に於て翻譯せられしものにして、列強の現勢を知る好著たり。

歐洲の大戰亂は未だ終局の曙光をも見ず容易に列國の状況をうかがふこと能はざれ共交戰諸國何れも學術の研究やまず着々として進行しつゝあるを以て戰後凡ての方面に於て大なる變動を來し、一時代を劃するは火を見るよりも明なり。従て我國の世界的位置に關しては最考慮せざるべからざる點なりとす。今後我國の史學地理學の研究の益々盛ならん事を特に切望する所以なり。

以上報告す。